

イスラエル通信

キブツクファル・マサリック
グループより

萩原 剛

シャローム！ 第二便です。
遅れてすみません。時あたかも今日、吉見崇一氏から手紙が届き、阪急より一人宛65ドルの入金が伝えられました。この件については協会でも大分気をもまれたと思いますが、これで一件落着。月刊キブツ5月号6月号は確かに受取っておりますが、当村のウルバン・ヤパニ（日本人のヘブライ語クラス）も『日刊キブツ』を不定期に発行し、ゴシップ記事や連絡事項の情報源となっています。以下に

4月中旬以降の主な出来ごとを報告したいと思いますが、その前に各人のニックネームを紹介しておきます。

—— 石橋政直（ナオ・労働大臣） 千川了（リヨウ） 堀田昌夫（マサ・外務大臣） 久我道夫（ミチオ） 中嶋君江（オキミ） 宮村富士子（オフジ・レクチャー担当） 大桶康子（ヤッコ・日刊キブツ編集長） 佐久間道子（チコ） 西坂華野（カノ） 宮崎美和子（ミヤ） 腰越律子（リッコ） 藤巻由美子（ジュン・ボランティア係のレア担当） 金子武美（タケミ・首相） 萩原 剛（オタケ・通信担当） ——

4月27日各人にファミリーがあてがわれる。

5月1日ヘブライ語の先生のツビーがアコーを案内してくれる。

5月6日独立記念日の前夜祭の催しがあり、7日には、ラマト・ヨハナンの近く迄ピクニックに行く。

5月8日これまでのおおむね全員で果樹園の仕事をやっていたが、この日から分れる。各分野は、牛舎、テレビ工場、食堂、炊事場、綿畑、果樹園、鯉の池など。

5月13日葉子帰国。

5月19日北部国境近くの十字軍遺跡モンフォールなどへハイキング。

5月25日日本の夕べを行う。24日には、ヘブライ語も休みをもらって練習した甲斐あってか、当初の不安とはウラハラに、結構うまくやれた。また、この夜は、ロシアや南米からの新移民の子どものウルバンと一緒に催しがあった。

5月27日——29日綿畑の仕事をめぐってツビーと衝突、結局こちら側が折れる形で妥結。

6月3日——9日キブツの運動競技会。我々もボランティアと組んでサッカー、バスケット、テニス、ビンポンに出場。キブツメンバー達の水準の高さに舌を巻く。

6月6日シャブオットのお祭り。この週は、ヘブライ語も隔日のめぐりあわせとなり、また、日本人の談話室を自分達の手で部屋の前につたりして、生活に色を添える。レクチャーは5月3日、9日、30日、6月10日の四

回。うち二回は吉見氏の通訳つき。

堀田昌夫

協会が、真に良心的に共同体運動を紹介するつもりであれば、きれいな記事だけを記事にしている事を反省すべきでしょう。旅行社と違い、人間の幸福のため、キブツ研修や共同体運動をとらえているとしたら、研修という名目の内容の検討を、また、募集の仕方の検討を要すると思います。すなわち、前記にあるツビーの「仕事を選ぶならヘブライ語も教えないし、食事もさせない」とまでの発言を協会はどうのようにとらえるのでしょうか。安易な態度でのキブツ派遣を、そして、月刊キブツのきれいな記事を読んで出かけて来た人を送り込むという事に反省を求めます。

石橋政直

シャローム。ここに来て早くも二ヶ月が過ぎようとしています。労働係という大役を負い、交渉の難しさを強く感じています。『我

々のキブツにおける地位はどんなものか？』という問題が労働配置の折に影響しました。先日、メンバーも好まない仕事は我々にも合わないという理由で綿畑の仕事を辞退したらおどし文句や、キブツ側の決定であるなどと言われ、衝突がありました。結局、相手ともゆずり合い、綿畑の仕事にも行っています。このような問題に関して、これからどのように対処して行くかが課題となっています。

久我道夫

5月26日に『日本の夕べ』をやりました。観客も多く集まり、グループ全体の力を最大限に出しきり、とてもよかったです。

宮村富士子

相変わらず、たくさんお酒を飲んでいます。最近、週に二・三回、大小のパーティがあり、いやいやつき合っています。ヘブライ語の授業も何とか、いやいや行っています。キブツの生活にも馴れ、そろそろ退屈になり

始めましたから、ぼちぼち何か勉強でもしようかななどと立派なことを考えています。

中嶋君江

ヘブライ語の授業さえなければと、いつも思っているまで来た。この時間だけ静かである。話したくても話せないこのつらさ！あと四ヶ月、あいそ笑いとシャロームのあいさつのみで過ぎてしまいそうです。

佐久間道子

あっちの水は甘い……と歌った子ども時代、いま、おせじにも「ガキ」とは言われず、イスラエルにいる。こっちの水も、あっちの水も、日本の水も、結局あまいのかなア。

千川了

シャローム！ もう二ヶ月たちましたね。楽しくやっています。あと、四ヶ月たらず、なんとか有意義に、張切ってやるのです。

広田君子

ごぶさた致しております。さて、私達はイスラエルに到着してから昨日で丁度三ヶ月を過ぎました。その間、既に御承知のように厳しい現実と、太陽の酷熱にあつて、苦しいともいえる様々な感情の練磨を経験して来たような気がします。正直申しまして、さわやかに晴々と過ごして来たとは言えません。

その事によって、自分の考えが甘かったとか、イスラエルに、しかもキブツに来たことが誤りだったと考えている訳ではありません。また、他のキブツについて、何も知識も経験も持たない今、現在住んでいるキブツを悪いとか、良いとか断定する事もできません。

しかし、グループで来た事、六ヶ月という期間が決まっている事などからかんがみて、やはり、適切なキブツとは言えないような感じを持つに到っています。最初の一步を入れる所としては、あまりに極端な所だったと思うのです。個人でフラーとやって来た場合なら、もっと素直にこの現状になじんだのでは

ないかとも思えます。無制限とも言える各国からのボランティアが右往左往しているキブツ内で、仕事の配分もずさん極まりなし、時に、果して私らはこのキブツでは必要ではないのでは……と疑うどころか、確信してしまったり、それにしても、細かい所で時間の計算をしては、休憩、食事時間を差し引いて実働何時間だから、何時まで働けとか、朝四時から始めると言っておいて、実際、四時丁度に行つて待つても、実際に始まるのは四時四〇分からだつたり、ずさんとか言えない運営と、無意味とも思える計算高さと、冷静に批判しても、悪い部分ばかり目につきます。その上、Politicalで、文句があるなら出て行け、やはり、こういう現状は、はるばる日本から来て最初にぶつかるにしては厳し過ぎる事でした。

私達の言葉の不足が、最も大きな原因であるとも言えますが、それに加えて、日本とイスラエルがあまりにも遠すぎるというのも此に於いて、つくづく感じた事です。アジアからは今の所、日本人の我々だけです。つい先頃までタイの人が一人いましたが、あとは、アフリカのスワジランドという所から二人来てますが、他は殆んどヨーロッパ、北欧、

東欧、アメリカ、カナダからです。彼らは、私達が日本で北海道に旅行に行くような気分です、リュックに寝袋持参でフラーとやって来て、充分に楽しんで帰つて行くという。キブツは彼らにとつて、バカンスの手段でしかないように端からみていると見えます。それにひきかえ私らは、はるばると日本からある決心(?)をしてやって来て、何かを学ばねばと深刻になりがちです。その上、言葉が自由に使えない。彼らと会話する事がもう疲労となり、かつ、労働はきちんとやろうと言う不思議な倫理感で縛られている為、あらゆる事にまじめすぎて接し、あぐくの果てに疲労困ぱいしてヒステリーになる。これは充分に初めから、想像できる経過です。

キブツを観念の中だけで見た時、これはやはり一つの進歩した姿だと思えます。独立した個人が共同体を形成して、生活を分かち合うという事は、既存の社会からの脱皮と進歩を意味すると思えます。

しかし、やはり現実はいかにあるかと、今、絶望的でもあります。人間はそれほど発達した動物ではないという事を自覚したような気がします。今まで持っていた人間の欲望から解放される事は、永久にないのではない

かと……私だけの物ではない限り、私だけの物以上には大切にしません。誰でも人の持つていない物を持ちたがりです。キブツの中で『個人の物』は極くわずかしかなかった。それだけに『個』の物と『公』の物の差が大きすぎ、その現実を見て、私は、「あやっぱり」と思わざるを得ません。自分だけの所はきれいに大切に、しかし、自分の物でもあるけれど他人の物でもある所は、それほど大切には、それほどきれいにはしません。沢山の無駄もいけません。時間もルーズ、物を大切にしない、怠け易い……、自分の子供を極端に可愛がり、他の子供には無関心、しかし噂には敏感……。

すこし悪口が過ぎたかも知れませんが、しかし、これらは共同体の一面を見て多いに絶望している理由です。共同体に言うより人間に失望してしまいます。結局、人間の生活の中で『無駄』という事はとても大切な、必要な事であると思いますが、共同体を形成して進んで行こうとする時、焦点を合わせるのに、やはり、高い所に合わせるの難しく、低い所に合わせざるを得ないという事も現実です。その上、イスラエルのキブツが持つ魅力の一つは選択できると言う事です、つまり、

個人競争の社会とキブツ社会とどちらも現存し、自分の意志で選んだ結果キブツでの生活を取るという事に、意義があると思いますが、事実上はキブツで生活するしか仕方がないという状態で、キブツ生活を取ると言う事もありうる事で、その方が数的に多かったら、やはり、キブツの顔は我々が当初理想と感じた所から離れて行くことも成りゆきだと思えます。このキブツ自体が、一つの社会として見た時、非常にバランスに欠けているのも現実です。殆んど二〇〇才代の人ばかり、子供がメンバーの数よりもはるかに多くいて、その上、労働の三分の一とも言える部分をボランティアに負っている事も、決して安定している状態とは言えません。まさか、私達がお客気分分て来た訳ではありませんが、まとめて二〇人近くも、六ヶ月間も確かに、お預かりしますと言えるところではないです。各人にファミリーは紹介されても、各ファミリーに五、六人もの乳児も含めた多勢の子供をかかえて、狭い家の中で走り回り、泣いたり、叱つたりしている所に、一日の労働を終えてくつろぎに行くには、やはり適していません。

話し変わって、ヘブライ語の授業に移ります。アリエ氏は確かにヘブライ語の教師として魅力に富んだ人です。しかし、あまりに出るの悪い我々に彼のサブライムト(忍耐)もエネルギー切れのようです。自分でも怠け生徒だと思っています。何故もつと真剣に勉強しないのだろうと自己嫌悪していますが、労働のあと、しかも、一日の最も苦しい午後二時、四時までのクラスは、重労働とも言えますが一方では貴重な時間です。そうでなければ、あまりにも単純なキブツ生活で頭脳が硬化しがちです。それを救う為と言つては本来の目的が嘆きますが、頭脳を刺激するのに語学の勉強つまりイスラエルに来てヘブライ語の勉強は最適です。その上、アリエの授業は変化に富んで非常に興味を興きさせるものです。しかし、いかんせん日本人はほとんど語学の習得には才能がないといふ言いがありません。私もしかし、現在のところ彼は悲劇の教師です。六ヶ月の間に彼を満足させる

ことができるかどうか自信がありません。

東洋の海の中の小さな島、日本から初めて外に出て見て、自分がこのイスラエルの中でも不思議な人間なのかと疑うことがあります。町に出れば、人はジロジロと見ますし、キブツでは、何かぬぐい切れない疎外感を感じますし、しかし、今、日本人であって良かったとも思います。外に出て初めて差別と言え大げさですが、異和感が存在するのを知りましたし、また、その反面、どこの国のどんな人でも人間として通じ合える人も、極くまれですが、あるということも知りましたし、池の中から大海へ出て、確かに傷つきながらも多くの貴重な体験をしています。また、キブツの中であって、今までの生活基盤にあった社会的な束縛から解放されている自分を感じます。しかし、この解放感におぼれて出られなくなる危険も感じます。時々おそって来る時間を無駄にしているのではないかと、いう強迫観念に悩まされることはあっても、（現に、アリエモ、何故キミコはイスラエルに来たか、と問い詰めます）自分で望んで得た体験の中から、失望以外のものも発見することはできると思っています。

ネティブの自然は、やはり氣にいらっています。

す。あくまでも焼けつく太陽も、夜は別世界になります。私の部屋から見える日没も絶景です。大きな石がゴロゴロする荒地を、牛達が悠々と帰って来る風景は詩的で、牧歌的です。広い綿畑での草むしりも、非常に神秘的でした。

グループの全員も、今のところ大きな病氣もせず、元気に、かなり辛抱強くやっていると思います。浦さんが、既に御存知と思いますが、他のキブツに移りました。私も年のわりには、むしろ年が若いもなく元気にやっています。もう、まっ黒で（もちろん地が黒いのは認めています）どうにもなりません。吉見さんも昨日クファルから帰って来ましたが、元氣ハツツです。私達のグループみんな、彼から沢山の援助を受けたことを感謝しています。

いろいろなことを饒舌に過ぎるほどの言葉を並べて疲らせてしまったかも知れませんが、あるいはわがままとも、あるいは被害妄想とも取られるかも知れません。しかし、現実があるがままに感じ、見た事が殆んどです。もし、日本に帰って来たら、もうこうは言えません。ろ過紙を透したように、嫌なこと、悪いことは全部忘れてしまふのは必定です。

ですから勝手な言い分かも知れませんが、どうぞ今のここからの言葉をそのまま聞いて下さい。

川崎佳代

こんにちわ！ お元氣ですか？

早いもので、私達が日本を離れて二ヶ月あまり、あつという間に過ぎてしまいました。イスラエルでは、日増しに日中の陽ざしは厳しくなり、毎日が気持ち良く晴れあがっています。私はこの環境がとても好きで、美しい夕焼け、澄みきった夜空は本当に心がぐくさむ思いです。

ところで、私が今回はじめてお手紙を出しますのも、先日、栗崎さんの文責でグループからの手紙に書きましたことと関連するのですが、私が二ヶ月間、草野君と労働委員をしていての感想をお聞かせたく思いましたのでペンをとりました。

それは、私達の力量がたりないのと同時に言語の不自由さや、そして、一概に単純労働もあって、グループの幾人かが、自分達に与

えられた労働に、少なからず不満をもっていることや、労働に対して十分に満足していないというのが実状なのです。

キブツの労働に対する疑問や不満というのは、とどのつまりがキブツ側が私達を単なる季節労働者のようにしか見ていないのではないかと、このことなのです。それが、このグループ内に、不信感からいつ爆発するかかわらないという状態にある。と誇大表現かも知れないのですが懸念するのです。

その理由として、確かにネティブ・ハラメッドヘイの労働は、クファルマサリックなどからくらべると、厳しいところにあると思うのです。いったい労働の喜びとは何なのでしょうか。何かしら、その幾人かの人も、また私にしても、日本からひきずって来たものが多々あるような気がするのです。

この人は、よく「This is Kibbutz」という言葉を使います。「ここはキブツであって、日本ではないんだ」という意味でしょうね。そしてまた、私達は研修生であり、グループでやって来たのですが、決して皆んなのキブツに来た目的は同じでないし、両極端の人もいるように思います。だから、結局、キブツに来て、良きにつけ、悪しきにつけ、何

を体得するかは自己に還元するのであるから、常に自己の位相を確かめつつ、自分を見失いたくないですね。ただ、グループで来ている以上、「我」を通す前に協調性の大切さを自覚しなくてはならないと思います。

先日、アリエさんは私達の幾人かがアンハビー（不幸）であることを鋭く察知されて、吉見さんもまじえてミーティングを持ったのですが、時間もあまりなかったり、結局、重大な問題は後日にまわすことになったのです。本当に、お互いに心と心を開けあわなくてはいけないのですが、お互い（キブツ側と私達）の意見と意見、気持と気持がうまくみ合わない腹立たしさは、私達の語学力の貧しさもかなり比重を占めているような気がします。

ネティブ・ハラメッドヘイの皆んなは旅行に行くのが好きで、金、土、を利用してはイスラエル北部から南部まで、遺跡巡りをしている人もいます。これから暑くなり、仕事もきつくなっていくと思うし、なによりもアリエさんは、一日に新しい単語をいくつも教えるのでヘブライ語の方も大変ですが、みんな元氣でがんばっていきますので安心して下さい。

日本協同体協会より

奥村久雄

この協会の事務所で仕事をしていて、ほんとうにうれしいと思うことの一つは、イスラエルにいるキブツ研修生からの便りを受けとることです。

特に今回の研修生諸君には、こちらの手違いから、旅程を一日短縮しなければならなくなり、イスラエルまでの旅行で、きびしい日程を強いなければならなくなった。また、イスラエルに着いて、キブツ・ネティブ・ハラメッドヘイでは充分な受入準備もされていなかったようで、最初に彼らの受けたショックは大きく、それが、あとあとまでも尾をひいて、いつそみんなを疲れさせたように感じられる。

送り出した我々にとっては、いつもいつも彼らのことが気にかかって心配だ。そんなこともあって、特にネティブ・ハラメッドヘイから来た便りを開くときには、ドキッと胸の高鳴りをおぼえずにはいられない。今では、みんなも落ちついて、各自の生活ペースをと

りもどしてくれているようで喜んでい

広田君子さんが『このキブツは、六ヶ月間研修生としてやって来たグループを受け入れるには、適切なキブツではない』と指摘していますが、これは、広田さんだけでなく現地にいる何人かの仲間達が感じていることである。実際に、その場で研修生活をしている人がそのように感じて、言っているのだから、我々は謙虚に耳をかたむけ、今後のキブツ研修生の派遣に生かさなければならぬと思っている。

ネティブ・ハラメッドヘイは、昨年も日本人グループを受け入れており、今年は昨年につづいて二度目である。たしかに夏期のこのキブツのボランティアは特に多く、昨年、このキブツに行った研修生も、数々の不満を感じたこともあると思うが、他の三つのグループにくらべて、特にここが悪かったということとはなかった。たとえば、キブツ・ギネガルなどは五十年の歴史をもち、生活環境は美しく整備され、実にいいキブツで、研修生に対する労働条件なども甘かった。しかし、研修生達と日本人係をしてくれたミリアムさんとの間に信頼関係が生れず、グループの中の人間関係もあり良くはなく、不満が多かつ

てや、若い研修生の諸君がキブツの労働でダウンするとは思われない。馴れない仕事で、はじめは疲れが大きく感じられようが、生活に馴れるにしたがって、みんなは益々たくましくなっていくと確信している。

だから、キブツにおける研修生活に、やり切れない不満を感じている人があったとしたら、その原因は、一にも二にも人間関係にあると思っ間違いないだろう。信頼関係が存在しない人間関係は、潤滑油の切れた機械を動かすようなもので、動かせば動かす程、まさつが大きくなり、どうにもならなくなり、破損してしまう。人間の相互信頼という潤滑油があるとき、キブツというシステムは無理なく動き続ける。

ネティブ・ハラメッドヘイで、日本人グループとキブツのメンバー達との間に、信頼関係ならぬ不信任が存在すると聞いて「これは大変なことになった」と思った。昨年の研修生の一人が、ドイツのミュンヘンでアラブゲリラによるイスラエル選手団の殺害事件の起った時にとった言動が、キブツのメンバーに不愉快な思いをさせ、その印象が残っていて、今年の研修生に対しても冷たい態度をとられて、いやな思いをさせられた仲間がいるとの

た。

一方、ネティブ・ハラメッドヘイでは、キブツとしてはガラッパチな所があり、若い建設上のキブツで、いままて工場を持たず、果樹園を主体にした農業だけでこの経済を支えて来た。今年から電気製品などの包装用品を作る小さな工場が運転されているはずだが、比重は小さく、典型的な農業キブツで経済的には決して豊かなキブツとは言えない。夏期のモモ、ナシ、リンゴの収穫期には、短期間に多くの労働力を必要とし、外国からのボランティアもほとんど受け入れるし、イスラエル軍のナハルの兵隊なども動員され、キブツの中は騒然となる。モモなどは収穫が一日遅れたら商品にならない。日本人グループに対しては、一日六時間の労働、二時間のヘブライ語学習という条件が、イスラエル側の日本の研修生受入委員会との間に交わしてあるが、忙しい時には、ヘブライ語学習を中止して八時間働くことが要求された。もちろん、この余分に働いた二時間は、あとで労働時間から差し引かれる。今年の研修生諸君に対しても、八時間労働が要求されたかどうか私は知らない。あの焼け付くようなイスラエルの太陽が、ジリジリと照り付けるもて、一日

ことだった。さつそくアリエ氏に手紙を書いた。彼はキブツの総会で発言し、キブツメンバー達の反省をうながしてくれたそうだ。

実際に、特に日本人に対して冷たい態度をとったメンバーがいたのかも知れないが、言葉が充分わからない間柄では、微妙な受け止め方の違いもあり、大変な誤解をまねく結果にもなりかねない。憶測や悪感情をまじえずに、彼らの言動を受け止めてほしい。

キブツにおけるボランティアの立場は、ともすると労使の関係のような感じで受けとられがちである。準メンバーもそうであるが、ボランティアや日本からの研修生は、キブツの運営に対して総会で議決する権利は認められていない。単に労働力を提供するような立場におかれるので、自分がキブツに使われているような気になったりしがちである。また、キブツのメンバーで、ボランティアや日本人を働かせているのだと考えている奴がいたとすれば、それは、まさにキブツの墮落としかいえない。しかし、この辺は実に微妙だと思う。みんなは、「いやなら出て行け」と言われると言っているが、たとえキブツのメンバーであっても、いやなら無理してキブ

六時間の労働は決してなまやさしいものではないことは私もよく知っている。それが、八時間ということになれば、なおさらのことである。

しかし、こういうきびしさの中でも、昨年のグループは、ヘブライ語の先生だったアリエ氏との間にすばらしい人間関係をつくりあげ、信頼関係で結びついていた。そんなことがあって、ガラッパチの中に、いつ行っても研修生のみんなに生気が感じられた。今年も、アリエ氏が日本人グループの世話をしてくれるというのでこのキブツを選んだのである。私は、キブツ研修がうまくいくかどうかは、労働条件のわずかなきびしさや、生活面の物的環境よりも、そこに良き人間関係を作り出せるかどうかにかかってくると思う。

如何にキブツの労働がきびしいといつても一日六時間、せいぜい長くなくても八時間で、どんなに働いても日本の農家の労働にくらべれば問題にならない。日本の協同体の多くは、イスラエルのキブツよりも、はるかにきびしい労働条件の上にならっている。農家に生れ、農家に育ち、農業労働に従事して来た私は、確信をもってこう言えるし、キブツの労働がきびしいと思つたことはなかった。まし

ツに留まって生活しなければならないことはない。『いやなら出て行つたらいじやないか。どうぞ』となるのは当然のことで、ヘブライ語では語調がきつ、日本語のような優雅なびびきがないので、すべて命令されているように感じられるのではないだろうか。

キブツには、正式なメンバーとそうでない研修生や、ボランティアの立場の人が同居している。メンバーでない一時的にキブツに滞在する人々に、キブツ運営に対する議決権が与えられていないことに対しては理解できると思う。だからといって、自己をキブツに使用される者という立場におき、使用する者とされる者という対立関係の観点に立つて、どんなにキブツを理解しようとしても、それは、まさに見当がいでしかない。

自分がこのキブツのメンバーであつたら、どうするだろうか？と自分をメンバーの立場に置き換えてキブツを考察する必要があると思う。

私たちが第一回研修生だった時は、労働時間は週に八時間が三日、六時間が三日だった。メンバーといつしよに、さいごまで八時間働いた日は、実にすがすがしい気分と、ある種の満足感があつたことを思い出す。